

板によって保護された東跡跡土壇。唐招提寺の見えざる歴史と対峙する。

MEMENTO



建築や都市は重層する歴史の写像である。

歴史都市奈良、その唐招提寺は天平の時代から1200年もの歴史を現代に示し、我々に訴えかけてくる。

人々は今尚雄大に建つ唐招提寺の伽藍と出会うことで、奈良時代の気風を感じ、思いを馳せる。

だが、今一度境内を見ると、金堂のように残り続けてきたものがあれば、東塔のように失われたものもある。

今尚存在を誇示する金堂を唐招提寺の歴史の光とするならば、存在を失い二度と人目に触れることのない東塔は唐招提寺の歴史の影だろうか。

しかし、そうした歴史の影「無い」ものも我々に何かを訴えかけ、我々に何かを想起させる存在になり得ないのであろうか。

「無い」ものを守り、「無い」ものと出会い、「無い」ものと対話する。そのような場の構想である。

SITE MAP 1:4200



唐招提寺・東塔

中心伽藍の建立開始から50年後(810年)に4間4面、高さ12丈の五重塔として創建開始。以降、5度地震で被災し、1802年、落雷で焼失。

塔跡はその後、明治期に礎石が全て持ち去られ(明治の除地令で官没され旧土族に払い下げられてしまい、その時分に塔礎石は掘り出され、全て死れたと考えられる。)、現在の不整形な土壇の状況を示すにいたっている。(心礎は山県有朋の椿山荘(東京目白)に送られたとされる。)

塔の心柱の焼け残りで鑑真和尚の像を彫刻、裏に由来を書き、ゆかりの寺に納めている。そのうえ、新宝蔵にある多宝仏座像と同じ座像の釈迦仏は創建以来、塔の本尊であったとされる。

(奈良六大寺大観 / 徳田明本『唐招提寺』)

唐招提寺・東塔に関する調査

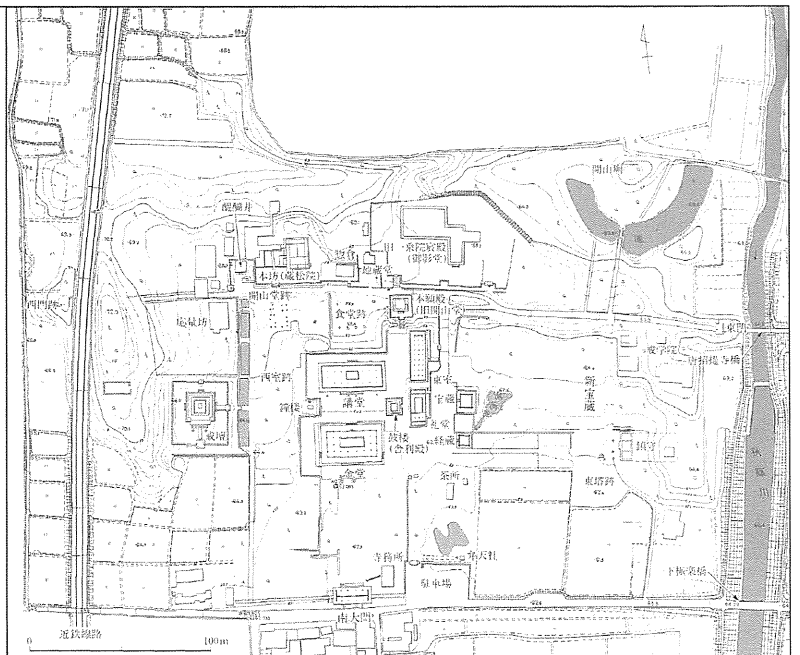
凝灰岩の破片が数点出土し、創建当初の塔基壇は凝灰岩を用いられていたと考えられる。

出土した軒瓦は同種が極めて少なく、中世以降の五重塔の軒先は統一性に欠ける様相を呈していたと考えられる。

溝・段差や、創建当時の足場跡(類例が少なく、貴重な例)が確認される。

塔院の範囲については東辺、南辺についてはおよそその位置は推定される。

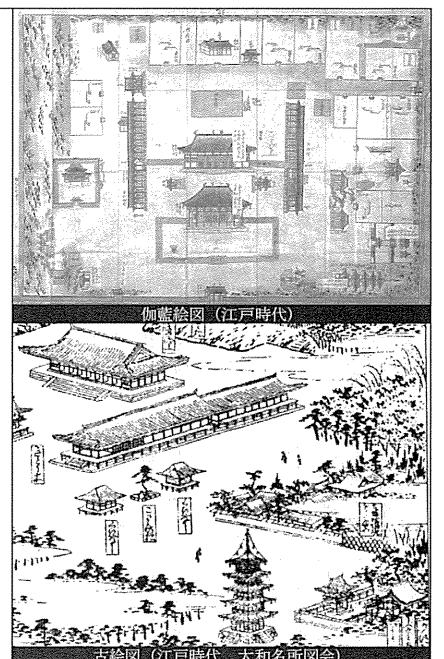
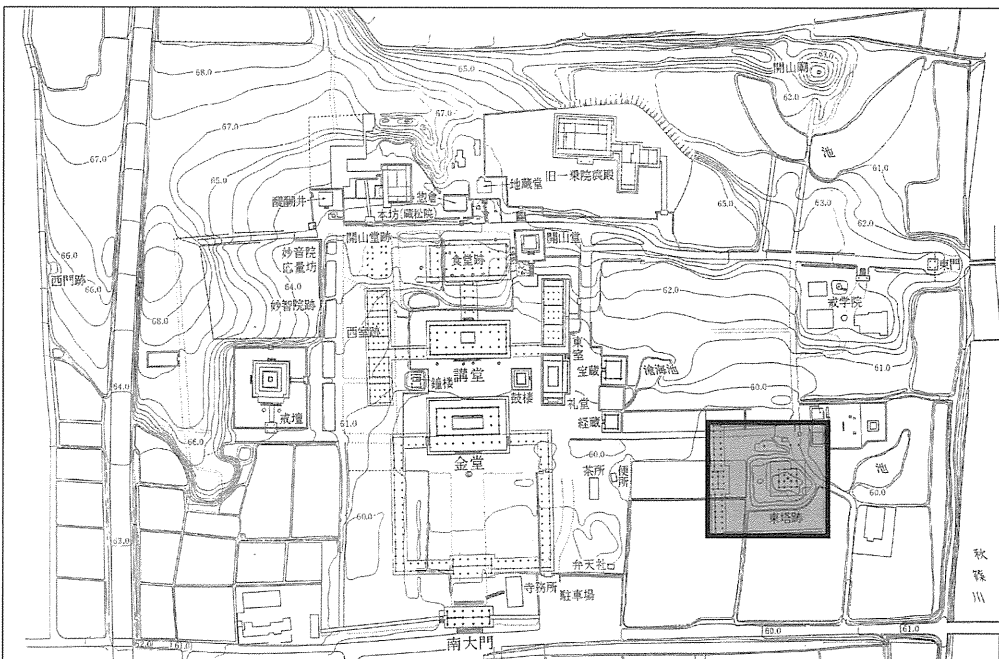
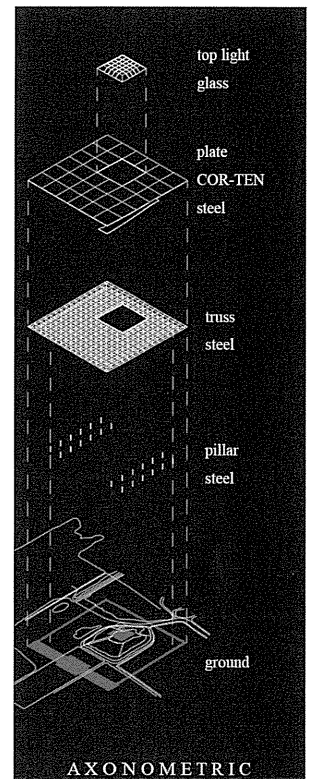
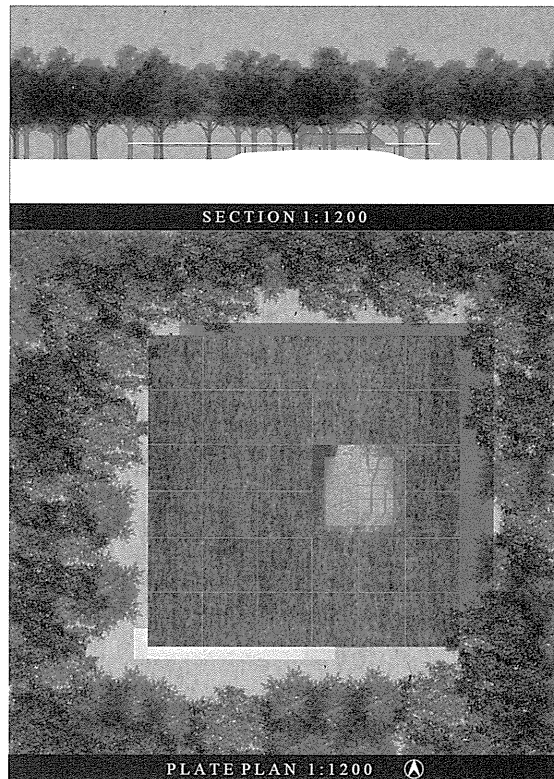
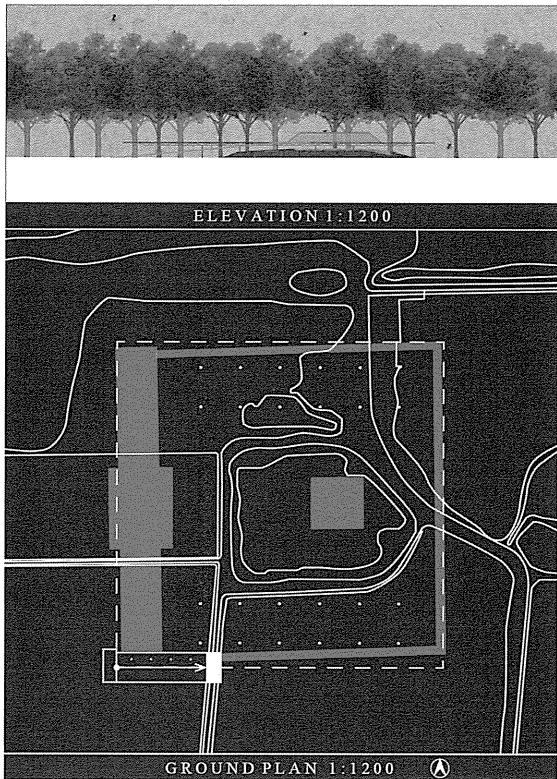
塔院の囲い(回廊若しくは築地塀)については後世の削平などのため特定できず。(奈良県遺跡調査概報 1999年度 唐招提寺旧境内第13次調査 / 梶原考古学研究所)

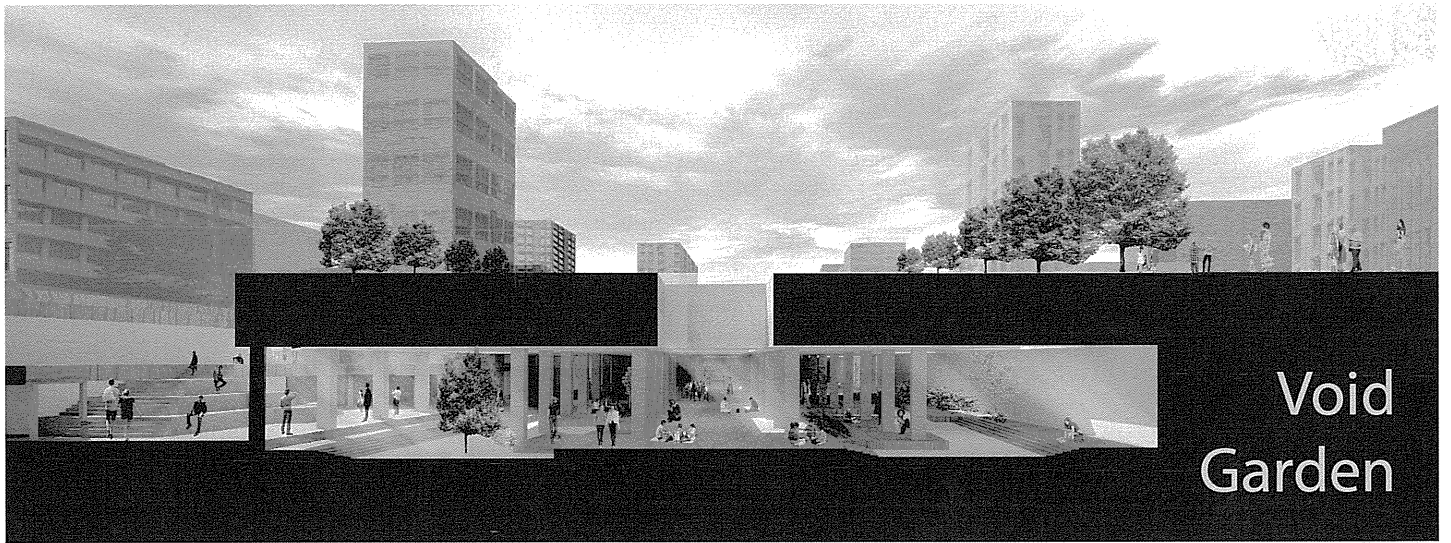




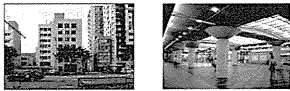
板の上から見る伽藍・木々。唐招提寺の見える歴史と対峙する。

— 唐招提寺東塔跡ミュージアム —





Problem



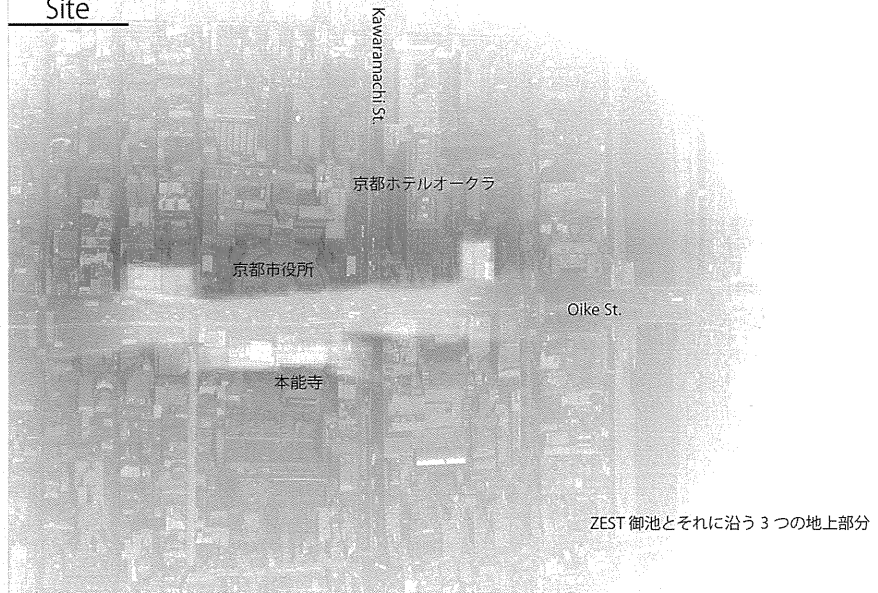
敷地周辺の河原町、御池通りは京都市役所など京都の中心となる機能が集中しており、さまざまな人々が集まるが、気軽に集まることができる、仕事場でも自宅でもない、「たまり場」のような空間がない。

Concept

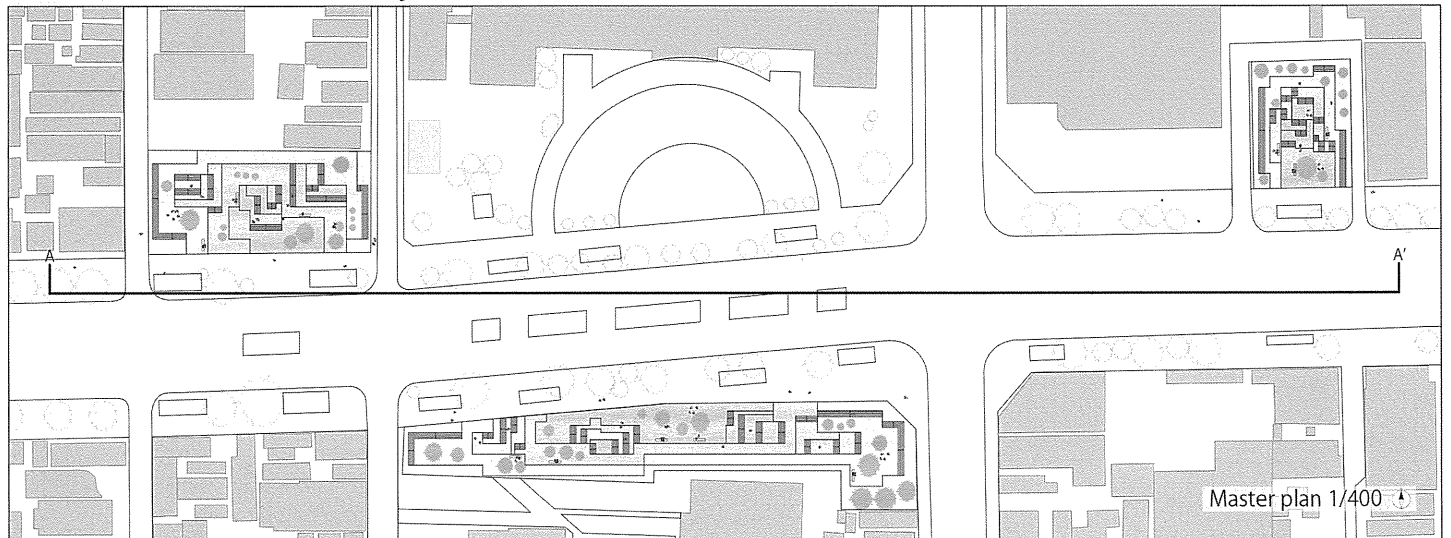
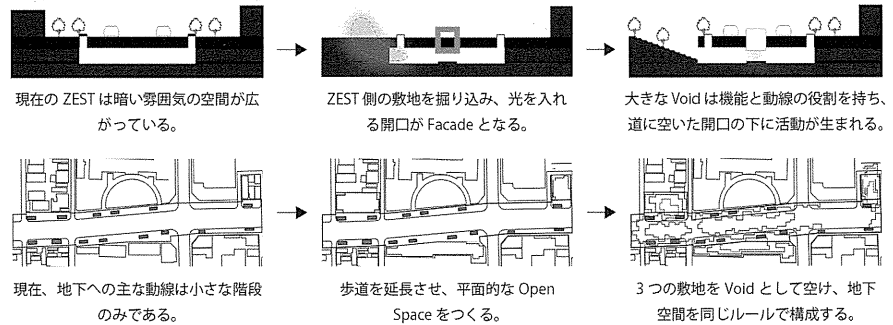
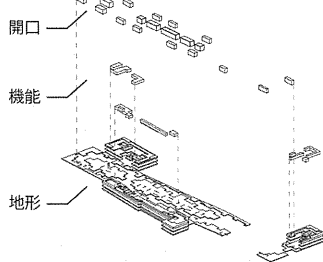


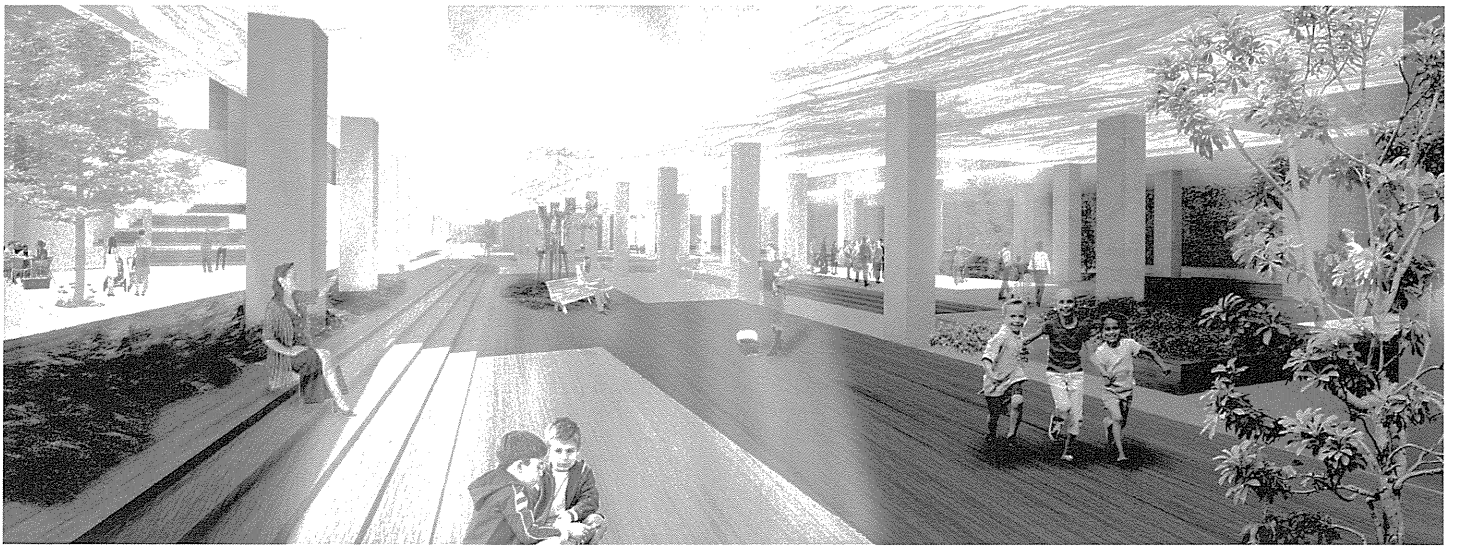
御池通に人々が溜まる Open Space を生み出す。人々はこの空間を歩道の延長と認識する。この Open Space は地下空間への誘導を促す Void の役割も併せ持つ。3つの敷地に空けられた大きな穴は通り抜ける風、地下へ入る光、人の動線を演出する。

Site

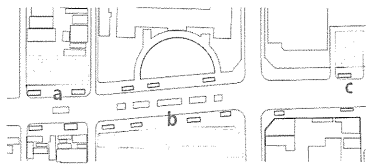


Diagram



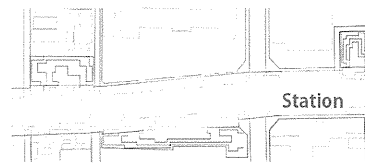


Program



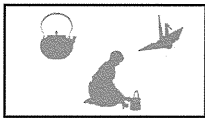
On the ground

地上の Void は観光センターなどの機能と併せて、風の通り道、光の入り口にもなる。



Under the ground

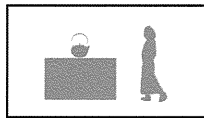
地下に広がる空間は今までの暗い曇り気の空間から、光が落ち、風が通る、緑の多い空間となる。



a. 京都の伝統産業を体験することができる空間。



b. 観光客が集まる拠点。観光情報コーナーや多目的スペース、カフェなど。



c. 京都についてや、伝統工芸品の展示などが行われる。



天候に左右されないさまざまなイベントなどが行われる。



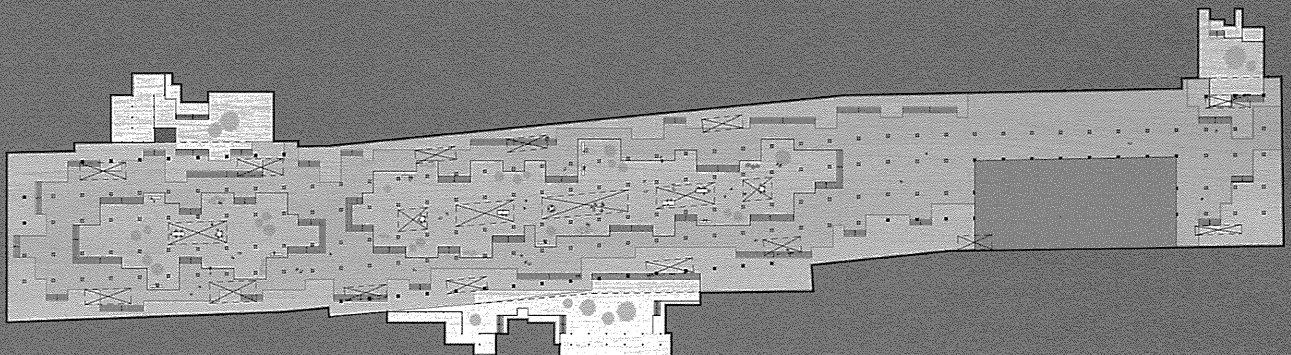
ローカルビジネスやサステイナブルビジネスなど、新しいアクティビティが生まれる。



市民や観光客の憩いの場になる。



A-A' section 1/400



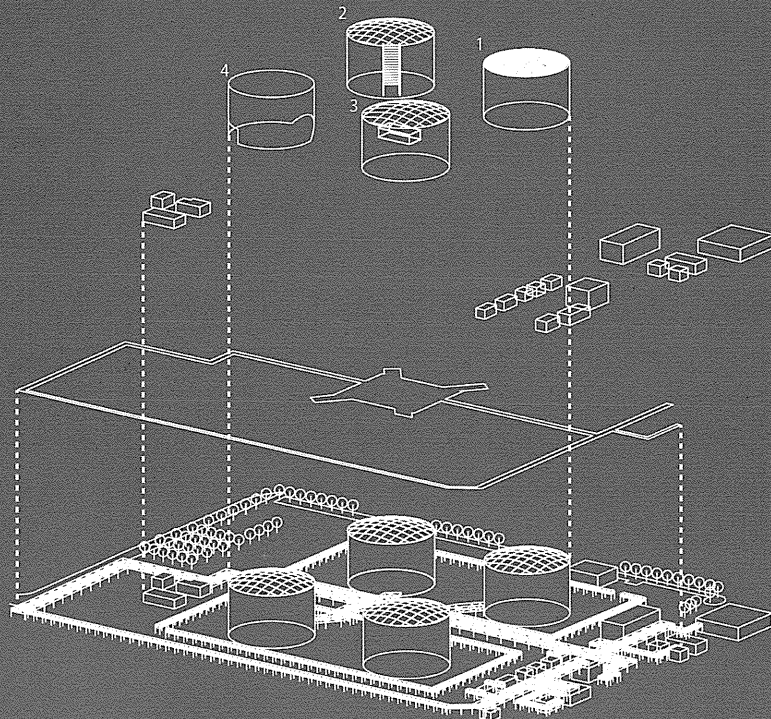
Underground plan 1/400



20th century's vestige

1900年代後半、日本は高度経済成長を経験するなど、大きく経済を発展させてきた。
 そして、その発展を支えてきたのが港、道路、鉄道といったインフラであった。
 数多くの工場が建てられ、物流が発達し、日本を支えてきた。
 今回の敷地、四日市港もその中で、中京工業地帯の中核として重要な役割を担ってきた。
 沿岸部にはコンビナートが立地し、石油化学工場が立ち並ぶ。
 しかし、21世紀を迎え、人口減少と共に経済の縮小が懸念され、インフラは老朽化してきている。
 これまで石炭石油に頼ってきた発電も燃料の枯渇が懸念され、現在のようなエネルギー供給システムが成り立たなくなるかもしれない。
 再生可能エネルギーが普及し、発電システムが分散することも予想される。
 現在稼働している四日市港の工場群、発電所もいずれ役割を終え、終焉のときを迎えるだろう。
 ここでは、新しいプログラムを提示することにより、発電所が建築として新たな時を刻み始める術を夢想する。

Overall Structure Axonometric Composition



Tank

タンクをエントランスホール、劇場、野外劇場、公害資料展示施設として展示する。

Atelier / Gallery

タンク周辺の既存建屋を残し、アトリエもしくはギャラリーとする。

Air Corridor

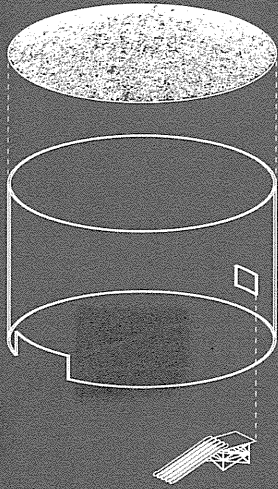
既存のパイプラインの上にガラスを張り、空中回廊とする。流れるものが燃料から人に置き換わる。中央の広場は4つのタンクの緩衝空間となる。

Art Plaza

アーティストは自ら好きな場所を見つけ作品を展示する。敷地全体が展示空間となる。

1. Entrance Axonometric Composition

人々を向かい入れる最初の空間は他を圧倒するものでなければならぬと考える。巨大なタンクにエントランス機能のみを持たせる。天井面の加工による採光と動線の確保のための最小限の操作を加える。直径 63m、高さ 40m という圧倒的なスケールの中で、ただ光だけが降り注ぐ祈りの空間とも言うべきエントランスが出現する。



Roof

屋根を架け替え、採光を確保する。
無数に穿たれた開口から鮮やかな光が降り注ぐ。

Tank

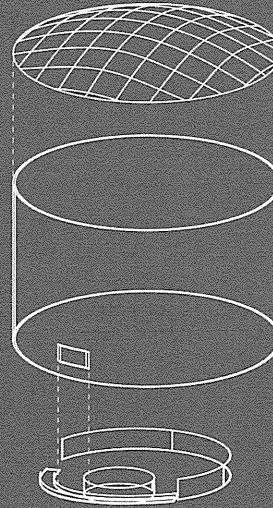
既存タンクには動線を確保するための最小限の開口を穿つ。
来訪者が訪れる最初の空間は壮大で、光によって導かれた人々を包み込む。

Escalator

エントランスのタンクには新たな構造物としてエスカレーターのみを挿入する。
機械的に移動した来訪者がタンクから出ると、そこにはかつて発電施設として使われていた建物が新たな姿となって眼前に現れる。

2. Museum Axonometric Composition

四日市の発展の影には「四日市喘息」という決して忘れてはならない負の歴史がある。時が経ち、空気は浄化され環境は改善された。しかし、その記憶は決して消し去られてはならない。ここではその当時を写真や新聞記事、裁判の記録を展示し後世にその記憶を伝える。タンクには出入り口となる開口を設ける以外の操作を加えず、タンクそのものが歴史を伝える展示品となる。



Roof

既存のまま保存する。
天井面の配管や形状もそのまま残し、タンクそのものを展示品として扱う。

Tank

既存タンクをそのまま保存する。
動線となる開口のみを穿ち、ほとんどそのままの形状を保つ。

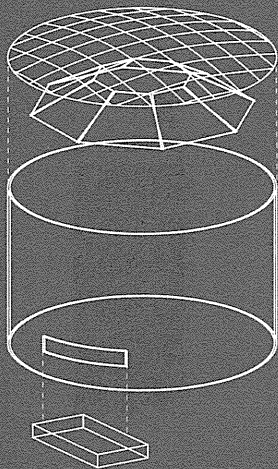
Slope and wall

資料館となるタンクにはスロープ、展示壁、映像資料室を挿入する。スロープはタンクの円にもうひとつ円を重ね合わせるように設け、配管を避けてタンクに刺さっていく。
展示壁はスロープからの人の流れを受け止め、図書資料と写真資料を緩やかに分節する。

3. Theater Axonometric Composition

タンクを劇場として使用する。巨大な円筒の中に収容人数 3000 人の巨大なホールが出現する。

ステージを円筒の中心に据えることにより、ステージから客席までの距離を 30m 以下とし、2 階席を設けず客席を一体的なすり鉢状にすることでホール内に一体感が生まれる。



Roof

ホール内の音響機能を保つため、天井面に反射板を取り付ける。反射板は吊り構造とし、屋根を取り替える。

Tank

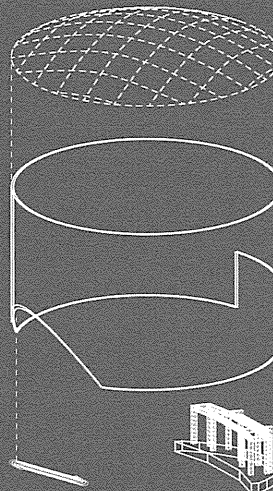
出入り口となる開口を穿つ。タンク内に機能上必要なスラブを設け、座席、裏方を確保する。これらの構造はタンクとは線を切り、タンクとは独立した構造とする。

Glass Box

タンクにガラスのボックスを突き刺す。
このボックスにはエントランスとしてのたまり場、雨よけ、ホワイエへの採光、有料と無料の仕切りとしての機能を持たせる。

4. Open-air Theater Axonometric Composition

タンクを野外劇場として用いる。タンク内は可変性を残し、一種の実験劇場となる。
穿たれた開口から中で行われている演奏が漏れ出し、人々を惹きつける。



Removed-Roof

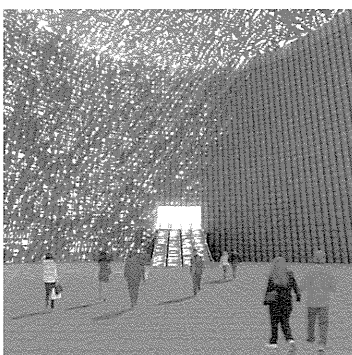
既存の屋根を取り払い、野外劇場とする。巨大な壁に覆われた劇場は空のみ切り取る。

Tank

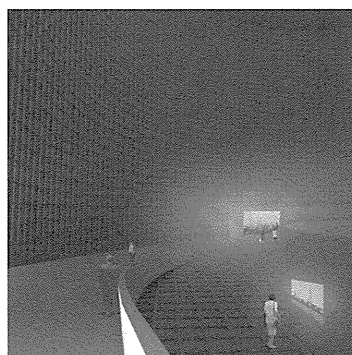
タンクの端を切り落とす。出入り口側を斜めにカットし、グランドレベルにもタンク内の活気が溢れ出す。
反対側の開口は海の風景を切り取るフレームとなる。

Escalator and Stage

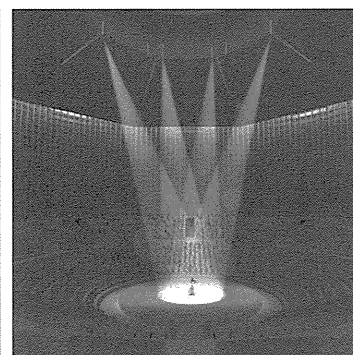
タンクに施したカットと微かにずれた角度でエスカレーターを取り付ける。タンクとの距離感をエレベータという機械的な動きで強制的に変化させ、タンク内に入る。



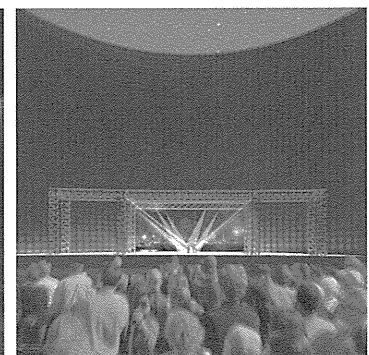
1. Entrance



2. Museum



3. Theater



4. Open-air Theater

スタジオコースの作品から

2015

学部4回生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むこととなる。それぞれの担当教員が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。その中から2015年度は2コース3名の作品を紹介する。

MEMENTO

p.4

吉永和真

Void Garden

p.6

進藤拓哉

20th century's vestige

p.8

田中健一郎

岸スタジオ

歴史と接続する建築

建築や都市には、それぞれに光と闇を内包した歴史がある。われわれがこれから新たに構築する建築物は、そうした歴史にどのように対峙し、継承してゆくことができるのだろうか。

本課題では新しい時代の流れの中にその立ち位置を見いだそうとしている都市である奈良、その唐招提寺に計画するミュージアムの課題を通して、このことを問うてみたい。

門内スタジオ

都市と建築

21世紀を迎えて、大量生産・大量消費を基調としたデザインが行き詰まり、環境や社会の制約条件を考慮して幅広い要求を質的に満足するデザインへの転換が求められている。そこでは、デザインを「人間と環境との関係に変化をもたらす」営みとして理解し、個々の人工物のデザインにとどまらず、人口相互の関係や人工物と環境・人間との関係に配慮することにより、豊かな環境・社会システムをデザインすることが求められている。

都市の中の建築は、他の人工物や人間・環境とのネットワークを形成する結節点として存在する。このスタジオでは、「都市と建築」のダイナミックな関係に焦点を結び、京都という都市をフィールドとして、ミクロな建築レベルの環境のデザインを通して、マクロな都市レベルの環境をデザインする可能性を探求する。具体的には、歴史都市・京都の都市空間に「魅力的な場所と風景を創発する新しいタイプの建築（の集合）」を提案する。